

二〇一六年度 卒業論文

東日本大震災における僧侶の役割について

コピー 厳禁

L 1 3 0 1 0 7

廣田 大然

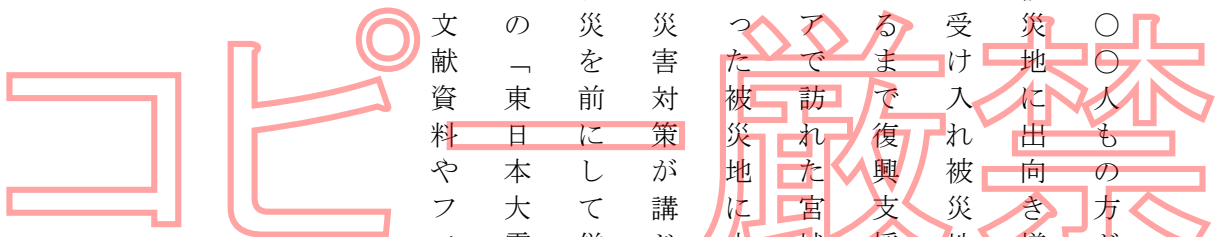
## 序論

二〇一一年に発生した東日本大震災は約一八〇〇〇人の方が亡くなった。全国から支援がなされる中で、浄土真宗本寺派の僧侶や門信徒は、震災初期から被災地に向き様々な支援を行っている。また、本願寺や全国各地においても追悼法要が営まれ、被災地の人々を受け入れ被災地の物産販売等を行っている。私は高校一年で東日本大震災を経験し、高校生のときから現在に至るまで復興支援というものを行ってきた。特に大学入学後、ボランティアNPO活動センター主催のボランティアで訪れた宮城県石巻市の大川小学校の光景は私にとって忘れられないものであった。私は多くの方々が無くなった被災地に立ち、初めて自然と念仏を称えさせていただく体験をした。文明は発達し、自然災害に抗うように災害対策が講じられていくにも拘わらず、やはり人間には自然を前にすると為す術もないのだろうか。では、大震災を前にして僧侶は何が出来るのだろうか。僧侶に社会からどのような役割が求められているのだろうか。私はこの「東日本大震災における僧侶の役割」という題を掲げ、大震災における僧侶の支援活動、臨床宗教師の活動を文献資料やフィールドワークによって、考察していきたい。

## 本論

### 第一章 東日本大震災での僧侶の役割

#### 第一節 仙台別院の取り組み



この節では、浄土真宗本願寺派仙台別院（以下仙台別院）の取り組みとして、仙台別院が立ち上げた東北教区ボランティアセンターの活動を見ていきたい。ボランティアセンターは、震災直後の二〇一一年三月十七日の設置以来のべ三万六三七名（二〇一六年八月三十一日現在）が利用してきた。また、今回仙台別院副輪番の廣川明秀氏にお会いして話を伺う機会を得た。仙台別院が震災直後から現在に至るまで行った活動を廣川氏の話を踏まえつつ見ていく。東北教区ボランティアセンターは、流入物撤去作業、物資搬送、茶話会活動、居室訪問活動、ボランティアセンターの運営の五点を中心に行っている。今回は、東日本大震災が発生した二〇一一年から時系列的に考察したい。

東日本大震災が発生した二〇一一年は、主に流入物撤去作業、読経ボランティア、ボランティアセンターの設立等が行われた。東北教区現地緊急災害対策本部は、東北教区ボランティアセンターの活動に関する報告書で流入物撤去作業と物資搬送をこう記している。

震災直後より、甚大な津波被害を受けた寺院2ヶ寺で、半年に亘り、毎日流入物撤去作業をおこない、併せて岩手県・宮城県・福島県沿岸部にある個人宅・公共施設などでも流入物撤去作業のお手伝いを行ってきました。（中略）震災直後は、全国から届けられた支援物資を沿岸部地域・自主避難者等へ物資をお届けしてきました。

この流入物撤去作業は震災直後の二〇一一年から約半年間、物資搬送は震災直後から二年間行われた。廣川氏は震災直後流入物撤去作業と物資搬送についてこう語った。

私は、流入物撤去作業で石巻市の称法寺さんと仙台市宮城野区の専能寺さんに入らせていただいた。称法寺さんに出向いた際、津波の被害と威力、強烈なおいを感じた。称法寺さんの場合、製紙工場が近くにあり本堂が製紙まみれだった。作業は、本堂の床をはいで下ロドロの製紙を取り除いたのを覚えている。僧侶、個人としてどこまでできるのか分からない状況の中、毎日パニックだった。

廣川氏によると、震災のあった三月十一日は、仙台別院として墓地の状況確認、門徒さん及び職員の安否確認、本山への連絡等を行ったようである。また、仙台別院の水道が幸いにも使えたこともあり、他所からの支援を受けながら炊き出しの提供をした。だが、震災直後動乱期に聞法に訪れた門信徒はいなかったようである。私は、動乱期に聞法等を求める門信徒がいなかったことに驚いた。それは、人間の力ではどうにも及ばない出来事に遭遇すると人間は何かにはいられないだろうと考えていたからだ。僧侶たちの活動は門信徒にどのような写ったのか。今回のフィールドワークで、仙台別院職員で浄土真宗本願寺派仙台別院門徒のH氏から話を伺うことができた。H氏は僧侶の活動を次のように語った。

震災直後、僧侶は肉体労働と読経の二手に分かれて活動されていた。私は、瓦礫を撤去してくださる僧侶に感動して前向きな気持ちももらった。今は落ち着きつつあるので、話を聴いてもらいたい。僧侶だから話せる話もあるので継続的に関わり、仮設や避難所に声かけしてもらいたい。

震災直後から半年間、僧侶は読経と肉体を使う活動を中心に行い、近頃は住民の精神的なケアに移行してきているようだ。住民に関する情報を社会福祉協議会等と共有する動きも進んでいる。僧侶はまさに苦しみを抱える

人々とその声を基に活動をする行政との潤滑油のような役割ができるかと私は考える。

次にお茶会活動と居室訪問活動を見ていく。お茶会活動の実践内容は、この後に書く第四節で明らかにする。この節ではサロン活動等を中心に整理したい。東北教区現地緊急災害対策本部は、東北教区ボランティアセンターは先出の報告書でお茶会活動をこう記している。

地域自立支援の一環として、2011年6月より名取市の仮設住宅などを中心に6カ所の仮設住宅においてお茶会を行っています。現在は、仮設住宅だけではなく、借り上げ住宅・自主避難者などを対象に仙台別院教化センターを会場としたサロン活動や公民館などでコミュニティづくりのお手伝いを行っています。\*

このような活動を行うと被災された方にどんな変化が起こるのだろうか。龍谷大学の鍋島直樹氏は『死別の悲しみと生きるービハラーの心を求めてー』にてこう述べている。

同じ境遇にある者同士で体験を語り合ったり、一緒に過ごしたりすると、言葉を超えたつながりを感じて、安らぐことがあります。\*

つまり、悲しみの感情を共感することが、自分の思いを打ち明けやすい状況を創り出している。借り上げ住宅や見なし仮設と呼ばれる空きアパート等を活用した仮設住宅は、通常のものとは比べボランティアの手が届きにくいそうだ。東北教区ボランティアセンターが支援不足の所に介入し、その住民が日々の安寧を取り戻す一助を担っている。また、これらの活動には必ず僧侶を派遣している。住民同士が思いを吐き出し悲しみの感情をとくに整理している。また、同報告書は居室訪問活動をこう記している。

仮設住宅でのお茶会や行事などに参加されない方々を対象に居室訪問を行い、心のケア活動を行っています。人に会いたくない・話したくないと部屋に閉じこもりがちな方々の悲しみ・苦しみの思いを聞き、少しでもその痛みが和らぐようつとめています。これまでスタッフ養成のため、居室訪問ボランティア養成講座を仙台市・陸前高田市・大船渡市で14回開催し、167名の方が受講され、活動在籍者52名と相談員13名が居室訪問活動を行っています。

この二つの活動に共通して言えるのは、被災された方への心の支援である。震災で薄れかけていた日常をお茶会という気軽に参加できる場をつなぎ止めているのである。また心の整理が付かない方が、社会とのつながりを失わないよう仮設住宅に出向いていると分かる。居室訪問活動の理念と意義について浄土真宗本願寺派総合研究所職員の金澤豊氏は、『大法輪』二〇一五年五月号にてこう述べている。

目的は「死にたいほどの苦悩を抱えた方の苦悩を和らげる」こと。方法は「個別面談によって、苦悩にまつわる気持ちをていねいに受け取る」こと。対象は「仮設住宅にお住まいの方の中でも、死にたいほどの苦悩を抱えた方」。(中略)少し前まで知らない者同士が、思いを共有することで気持ちが触れ合い、あたたかい関係になる。ここに居室訪問活動の意義が見出されたように思う。

廣川氏は、仙台別院の取り組みとしてサロン活動と福島県内での活動を次のように語った。

サロン活動は、同郷の方が再会できる場として提供させていただいている。この活動では法話をさせていた  
だく機会があり、このご縁をきっかけに本願寺の団体参拝に参加してくださる方もいらっしゃる。また、二

○一二年二月十三日には福島県復興支援宗務事務所が開所した。ここでは福島北組が主催する法話会が毎月十五日の夜六時から行われている。<sup>8</sup>

サロン活動には、仮設住宅団地の依頼により活動する出張型と仙台別院教化センターに住民を招く招待型の二種類がある。寺院は古くから地域社会のつながりを築く基盤であり、僧侶はそのご縁を橋渡しする存在であった。その特色を生かし、歓びと社会との関係づくりの場を創り出す役割が僧侶にはあるのではないだろうか。

現在、仙台別院および東北教区ボランティアセンターが行う活動は、主にお茶会活動と居室訪問活動である。震災後一年から三年にかけて安芸教区が、菊や御本尊等を届ける等、震災後数年はボランティアをはじめ宮城県外からの支援があったが、年々減少の傾向にある。これは東北地方の復興と震災記憶の風化が進んでいることを意味する。私は大学二回生から毎年宮城県を訪れているが、訪れる度に街が整備されているように思える。しかし、街の復興は進んでも心の復興は進んでいない現実がある。だから僧侶として、一個人として、被災された方へどんな言葉を届けてよいのか分からない。ただ、一つできることがあるならば、この震災を決して忘れないことと未来へ伝えていくことだと私は考える。

## 第二節 被災寺院、専能寺から考察する僧侶の役割

この節では、東日本大震災で被災した各寺院の取り組みを通じて僧侶の役割を考えていきたい。専能寺は、宮城県仙台市蒲生に存在する寺院で海から二キロメートル離れた所にあり、開寺四〇〇年を超す浄土真宗本願寺派

の寺院である。三月十一日に高さ二メートルを超す津波が本堂と庫裡を襲い、室内は流入物で荒れ果てていた。今回は専能寺の住職である足利一之氏と同坊守の足利由美氏にお会いして話を伺う機会を得た。その面会で専能寺住職の足利一之氏は、震災直後のことをこう語った。

震災直後は、専能寺にまつわるデマ情報が多く流れた。そのためブログを開設し、正しい専能寺の状況を流した。正しい情報は津波の被害を受けている人が一番知らない。翌日から私と坊守は二〇一一年十月二十一日まで連日葬儀を執り行った。震災の影響により、寺や火葬場が麻痺し葬儀を山形県で出すこともあった。だが、若林仏具店が震災の七日後に専能寺入りし、内陣清掃を行ってくれたことは有り難かった。また、北海道教区や九州各教区ががれき撤去をしてくれたことも感謝である。お寺の作業をお寺の者がしてくれたので復興を早くすることができた。

専能寺は、本願寺新報をはじめ多くのメディアに取り上げられる機会が多かった。ゆえに、多くの支援を受けられた反面、情報に振り回されたと考えられる。またご住職は、寺族が寺院の復旧活動を行う大切さを話していた。お寺をよく知る寺族もしくは僧侶が活動を行うことで、被災寺院の僧侶の負担軽減や門信徒へ活力を提供できるのではないか。

浄土真宗本願寺派北海道教区が発行した『真宗震災支援ネット』では、震災直後の三月二十日と二十四日の様子をこう記している。

岡田小学校近くの総代の家に住職が避難中との張り紙を見て、訪問。避難中の住職とともに、お仏壇の前に



て読経。(中略)無力感を覚えながらも専能寺総代のお仏壇にての読経に、我々も被災の人々もほっとする場面を経験。手を合わせる場所の重要性を再確認した。専能寺をいち早く復興し、そこを中心に地域復興の手伝いをする事。気持ちが疲れたときにこそ、復興された本堂があることの意味の大きさを、今更ながら思う。

ご住職がひとつの夢をお話し下さった。「毎月13日がお寺の常例法座。今月は無理だったが、4月にはご法座を再開させたい」との意向を受け、来月13日の一つの目標に、お寺を復興させ、新たな地域住民のコミュニティスペースとして、常例法座を開座にむけてのお手伝いを計画。こ

四月十三日の常例法座に向け、北海道教区のボランティアや真宗震災支援ネットの先遣隊などが土方作業を行った。これは、ただ専能寺で法座を再開することを目的としているわけではない。専能寺が常例法座を再開することで、地域社会の復興への架け橋に繋げるという気持ちがあった。

真宗震災支援ネットでは四月十三日を迎えた専能寺の様子をこう記している。

本堂は、柱や外壁の損傷がかなり激しく危険なため、青いビニールを敷いた会館を法座会場に仕立てました。午前11時『真宗宗歌』の斉唱で始まりましたが、その時から会場のあちこちで涙を拭う姿がみられました。(中略)阿弥陀様を中心に専能寺を復興していくことが、必ずや自分自身の心の復興にも繋がっていくということ。(中略)この一カ月間、無我夢中に過ごしてきたこと。多くのご門徒の葬儀を住職として出来なかった無念さ。北海道をはじめ全国の様々な方の行動力に励まされたこと。(中略)足利住職は「津波に流された方は家族のことを心配しながら亡くなっていったはず。生き残った私たちは、前を向かなくては」と涙を抑え、

咽ぶむ声で、静かに又力強く語りかけた。ご法話でありました。こ

ご住職と坊守様から当時の話を伺うと、次のように語られた。

多くの方々のご支援のおかげで、私たちは安心して悲しみの現場に寄り添うことができた。この常例法座の開催をきっかけに、六月一九日には合同葬儀を執り行わせていただいた。また、報恩講を目処にお寺を復興させようという動きが生まれた。現在では、毎年三月十一日の十三時から追悼法要を行わせていただいております、これからもこのご縁を繋げていきたい。

真宗震災支援ネットは、十一月十四日と十五日に執り行われた専能寺報恩講についてこう記している。

進入物の撤去作業をしていた四月の共同作業とは違って、「みんなが集まる寺」になってきていることを実感し、本堂と門信徒会館にジュータンが敷かれて、そこに座ってワイワイおしゃべりしている門信徒の姿こそが「おらほの寺」を慶ぶ姿でありました。

震災から約五年と十ヶ月が経過した現在、専能寺では二階堂和美氏のコンサートを行う等、精力的に活動している。今、専能寺はお寺に人が集まるように工夫し、失いかけた地域とお寺のつながりを再築している。ご住職は、寺院と僧侶の在り方についてこう話してくださいました。

私たちは、地域の復興はお寺からと考えており、まずお寺を元通りにしようという気持ちでやっている。門徒さんは家族と同じ存在だ。そんな家族がバラバラにならないように、災害時は門徒さんに関する情報収集を怠ってはならない。一度仮設住宅に門徒さんが入ってしまうとつながりが見えなくなってしまうからだ。

ここまで、被災地における寺院と僧侶が果たす役割を専能寺より見てきた。震災後に地域との結びつきを一層高めた寺院は専能寺だけではない。例えば、宮城県気仙沼市の臨濟宗地福寺町等がある。寺院を広く開放し、避難所や公民館の機能性を兼ね備えている。東北地方では、僧侶を「おっさっん」と親しみと敬意を込めて呼ぶ文化がある。寺院は、人々が僧侶を含め安心して過ごせる日常の一部である。つまり、僧侶は寺院を復旧させることで、門信徒たちに日常の安心できる場所を提供する役割があると私は考える。

### 第三節 ボランティア僧侶の活動

前節では、被災寺院が取り組んできた活動について述べてきた。この節では、震災後被災地で活動を行ったボランティア僧侶の活動に焦点を当てて見ていきたい。また、今回は曹洞宗普門寺の副住職である高橋悦堂氏に、震災直後の僧侶の活動及び臨床宗教師についてお会いして話を伺う機会を得た。高橋悦堂氏は、震災直後からボランティア僧侶として活動し、現在は臨床宗教師を行っている。ボランティア僧侶は、被災地において「読経ボランティア」や「仮設住宅訪問活動」などの復興支援にたずさわっている僧侶を意味する。本論文では、特に浄土真宗本願寺派僧侶と曹洞宗普門寺の住職である高橋悦堂氏を中心に考察する。まず、金澤豊氏と安部智海氏の二人の本願寺派僧侶の活動から、僧侶の役割を考えていく。藤丸智雄著『ボランティア僧侶』によると、僧侶の仮設住宅訪問活動についてこう述べている。

二人の僧侶の活動は、一般には「傾聴」と呼ばれているものだ。(中略)どんな話でもよいが、感情を受け止めるために「聴く」ことに徹する。(中略)言葉やしぐさの向こう側にある感情を、きちんと、ゆっくりと受け止めていく。必要なのは、上から下への指示や注意、励ましではなく、言葉と一緒にこぼれてくる感情をそばにいて受け止めることだ。相手が聴いて欲しいと思っているときには、逃げずに、じっと聴くことに徹することを心がけなければならない。「聴く」は、決して特別な行為ではない。<sup>15</sup>

ボランティアとしての僧侶が被災地で訪問活動を行う際に重要な点は布教することではない。まず被災された方々の感情を受け止めることである。被災された方々が喜怒哀楽を安心して口にできるようにすることが、彼らにとって一番の薬ではないか。金澤豊氏は河北新報社編集局編『挽歌の宛先』にて、次のように述べている。

「気持ち揺さぶられたりするわけだから。自分の考えや価値判断は一切持ち出さず受け止める」(中略)でも目撃談を語ってくれる人の表情は印象的だ。怖がるのではなく、慈しむよう。(中略)「死者の声を封じ込めてはいけない。亡き人の存在を縁として生きる、残された人たちの言葉を聞く」。少しでも心をほぐせればと玄関のベルを鳴らす。<sup>16</sup>

被災された方々は、大切な人を失っている。僧侶は、彼らの気持ちを推し量りながらも故人の存在を優しさや生きる力へと変換していく手助けをする役割がある。次は、曹洞宗普門寺の副住職である高橋悦堂氏への面談調査を通して震災直後から僧侶はどのような役割を果たしてきたのかを見ていきたい。

震災直後の三月二〇日より市内の曹洞宗寺院の僧侶に働きかけ読経ボランティアを開始した。これが震災後

に行った最初の活動であり、八月五日まで五ヶ月弱毎日続けた。霊柩車は足りず、軽トラやペリカン便で遺体を火葬場等に運んでいた。ある時、小学五年生の娘さんとそのお友だちを津波で亡くされたお父さんが読経を依頼された。読経後、お父さんがおっしゃった「拜んでもらって安心した。」という言葉が印象に残っている。このご縁を通してお坊さんには、人を供養して穏やかにする力があり、読経には安心感を与える力があると気づかされた。僧侶には供養、読経を行う役割がある。人間の力では及ばないものは多々ある。そんな日々の中でともに活動を行う僧侶の金田諦應は、「自然は花を咲かし全てを奪うがその善し悪しを決めているのは人間だ。」と私に伝えてくれた。観音さまの教えには「悲しみを知るから慈しみを知る」というものがある。ここ数年は、悲しみを助ける慈しみに変えていきたいと考えている。

今回、高橋悦堂氏と面談する中で気づいたことがある。それは、その時々に応じて一人の人間としてできる全てを勤めさせていただくことだ。震災直後、読経ボランティアを始め多くの僧侶が被災地でそれぞれができる支援活動を行った。今回の東日本大震災が私たちに気づかせたことは、「大事な人を失う悲しみ、苦しみはいつ訪れるか分からない」というものだ。それは、日々のうれしき、楽しきの絶頂にいるときにやってくることもある。そんな時、どんな有難い教えより、そっと話を聴くことが相手にとって何よりうれしいものである。結局、何かをしてやろうという気持ちが入り込んでしまうと相手の苦しみに寄り添う関係など成立しない。つまり傾聴とは実に繊細で難しいのである。本当の正解は苦しみの中にいる人にしか分からない。だから、つらいときに相手が発してくれたSOSを見逃さないようにしなければならぬ。私は今回の東北地方でのフィールドワークをどこ

か軽く見る部分があった。何度か東北地方に足を運ぶ中で、被災された方々の気持ちを理解したつもりでいた。

現在、高橋悦堂氏は現在宮城県栗原市内でカフェ・デ・モンクという宗教者による傾聴移動喫茶を行っている。主に仮設住宅の住民が発する悩みや苦しみを宗教者が傾聴し、その気持ちに向き合い続けている。またこの活動は、FM仙台にて「ラジオカフェ・デ・モンク」として放送されていた。僧侶も現実を目の当たりにすると悩む。正解の分からない問いと向き合うからこそ、僧侶をはじめ宗教者一人一人が真摯に傾聴することが求められている。これが、難しくもやり甲斐のある活動だと私は考える。

#### 第四節 宮城県名取市での浄土真宗の茶話会活動に参加して

私は二〇一六年十月二十五日と二十六日の二日間、浄土真宗本願寺派仙台別院東北教区ボランティアセンター（以下東北教区ボランティアセンター）が行っている茶話会活動に参加させていただいた。東北教区ボランティアセンターは、二〇一一年三月十七日の開設より今日に至るまで東日本大震災の被災地である宮城県を中心にボランティアの受け入れ、活動を行っている。現在では、茶話会活動を中心に居室訪問活動等を行う。この節では、フィールドワークで訪問した仮設住宅及び集会所で伺った住民の方々の話や東北教区ボランティアセンターの職員さんとの面談より僧侶の役割を見ていきたい。

まず、仮設住宅に暮らすAさんは東北教区ボランティアセンターが行う茶話会活動についてこう述べていた。仮設住宅の住民は元の地域が同じであり、お互いが顔見知りのためコミュニケーションを図るのは難しかった。

た。だから生活に慣れるまでは、外出できず近所とも話せなかった。西本願寺が行ってくれる茶話会のおかげで、住民はお互いを知りストレス解消する場を手にすることができた。今では、みんなが大きな家族のような存在になっている。

茶話会活動は、仮設住宅の住民にとって大切な地域コミュニティであることがAさんの話から伝わった。この活動では、お抹茶と全国各地から寄付されたお菓子を提供し、住民たちが他愛ない話や悩みごとを打ち明けられる雰囲気をつくっていた。私は、これまで僧侶とのつながりを求めて住民が集まっているという考えを持っていたので驚いた。実際は、仮設に住んでいる人々が横のつながりを求めて、いつでも集まれるように僧侶が支援しているのである。ここに茶話会を行う意義はある。僧侶は、布教活動を行う前にまず、自他の気持ちを共有する場を設けるのも役割の一つである。また、今回は浄土真宗本願寺派高岡教区の仏教婦人会の方々とも活動する機会を得た。高岡教区仏教婦人会のBさんは次のように述べていた。

「高岡教区仏教婦人会では、昨年から茶話会活動に参加している。一年に一度仮設住宅にその年に収穫した新米を届けさせていただいている。教区との交流を通して皆さんに元気になってもらえれば有難い。」

東日本大震災から約五年と十ヶ月が経過した。東北教区ボランティアセンター職員のA・Yさんは、ボランティアの支援についてこう述べていた。

茶話会に参加してくれる住民の方々は、元々暮らしていた地域で顔なじみの方や仮設住宅の抽選の関係で、別の地域から来た方もおられる。西本願寺として行う茶話会活動が個々人のつながるきっかけ提供になって

いると思う。茶話会に参加しづらい方へは定期的に居室訪問活動を通じて、お話を聴かせていただくこともある。しかし、一人一人が抱える大きな悩みを知り合いに打ち明けるのは、なかなか難しい面がある。そこに他地方からボランティアさんがお見えになると、かえって自分の悩みを話せることがある。これからもボランティアさんには茶話会活動に継続して参加して欲しい。〃

東日本大震災から約五年と十ヶ月が経過した。A・Yさんによるとボランティアとして宮城県外から参加する人は、年々減少しているという。仮設住宅から復興支援住宅に移る中で、抱える不安を打ち明けられるボランティアの減少が一つの課題となっている。震災の記憶は、被災地でも忘れつつある。私は、僧侶として人々に寄り添い共感的人間関係を築いていくことがこれからの支援に欠かせないと学んだ。

## 第二章 臨床宗教師としての僧侶の役割

### 第一節 臨床宗教師とは何か。

次は、生と死で苦しむ人に寄り添う僧侶である臨床宗教師の役割を考える。臨床宗教師は、世間でどのように認知されているだろう。臨床宗教師は二〇一六年二月十九日刊行の『週刊朝日』にこのように紹介されている。

臨床宗教師は、特定の宗教を想起させることを避け、様々な現場で宗教的な心のケアをする人の名称として生まれた。(中略)臨床宗教師の活動は、宗教や宗派に限定されず、相手から頼まれない限り布教や伝道もし



ない。公共性が担保されているからこそ、医療機関などで活動できるのだ。」

臨床宗教師は、病院や緩和ケア病棟であるホスピスなどにおいて、患者と家族の話に耳を傾け、相手の心のケアにたずさわる役割をする僧侶や牧師等の宗教者であることがこの記事から分かる。では、臨床宗教師は僧侶をはじめとした宗教者や学者たちの間でどのような認識がなされているのだろうか。龍谷大学教授の鍋島直樹氏は「臨床宗教師研修の目的と特色」にて次のように述べている。

臨床宗教師は、特定の宗教教団の勧誘を目的とせず、宗教宗派を超えた協力関係を構築して、心のケアを実践する。(中略) 個々の臨床宗教師は、自らの依りどころとする宗教の人間観、死生観、救済観を学び、世俗を超えた聖なる真実の中でわが身を省み、聖なる真実を依りどころとして生死を超える道を明らかにしておくことが重要である。<sup>22</sup>

臨床宗教師が医療現場に関わるのは活動の一部であり、相手の人生観を尊重するために、いきなり布教を行わず、宗教宗派間の協力によって心のケアにあたることが分かる。そして臨床宗教師は、自らが信仰する宗教の教義、人間観や救済観を心の拠り所として活動するとされている。つまり、苦しみの中にある人をまず尊重することを基本にし、相手を通して自らを省みる役割を果たしている。だが、臨床宗教師が世間一般に認識されたのは週刊朝日にあるように近頃のことである。

臨床宗教師は、宮城県で二〇一一年に岡部健医師によって提唱された。岡部医師は、欧米諸国で活躍するチャップレンと呼ばれる公共性の高い施設に常駐し相談相手になる宗教者に着目し、和製チャップレンとして、臨床

宗教教師を創り出した。現在では、東北大学や龍谷大学等をはじめとする大学機関で臨床宗教教師研修講座が開講されている。では、臨床宗教教師研修はどのような目的の下で行われているのか。東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座准教授の高橋原氏は「宗教者による心のケアの課題と可能性―臨床宗教教師養成の試み―」にて次の四点を挙げている。

① 「傾聴」と「スピリチュアルケア」の能力向上② 「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上③ 宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ④ 幅広い「宗教的ケア」の提供方法を学ぶ<sup>23</sup>

また、それぞれの目的を高橋原氏はこう解説している。

①の「スピリチュアルケア」とは、ケア提供者の価値観を押し付けることなく、ケア対象者の中にある答えに気づくことを手伝うという態度を重視するものである。(中略)「傾聴」がその基礎になることは言うまでもない。(中略)必要に応じて各宗派の流儀に基づいた「宗教的ケア」を行うことになる。(中略)具体的には、読経、祈りなどをはじめとする儀式、儀礼的所作を行うこと、神仏などの超越的観念、死後世界や魂の観念、それらを指示する語彙を用いて語ること、**宗教的物品の使用(数珠、位牌、ロザリオ、十字架、聖書、等)、宗教的コスチュームの着用などによって宗教的ケアは提供される。**<sup>24</sup>

臨床宗教教師研修では、直接向き合う相手に対して、**宗教的教義を押し付けられないように指導されていることが分かる。**第一に、宗教者が教義を伝道して信者獲得しようといった態度はない。相手が助けを必要としている時に「傾聴」し相手の要求に応じて「宗教的ケア」を行っている。

臨床宗教師は、宗教者であれば大学機関等が主催する研修の修了を条件に活動できる。彼らは病院等の公共施設で働く宗教者であり、資格を有しない分宗教者として絶えず自己研鑽を続ける覚悟が必要である。だが、その働きを数値化されることがないため社会的貢献度が分かりにくい。第二節では、医療現場に携わる臨床宗教師を見ていきたい。

## 第二節 医療現場で活動する臨床宗教師

前節で、臨床宗教師の定義を行った。第二節では、臨床宗教師が医療現場でどのように活動し、期待される役割は何を考える。今回は、臨床宗教師としても活動している先述の高橋悦堂氏と宮城県仙台市の昌林寺副住職である松山宏成氏を通して臨床宗教師を見ていきたい。高橋悦堂氏は臨床宗教師として自身の体験をこう語った。

「臨床宗教師として、末期の患者さんと関わらせていただく、死生観を感じていくようになった。」<sup>25</sup>

また、高橋悦堂氏は河北新報社編集局編『挽歌の宛先』にて、臨床宗教師についてこう述べている。

病気の痛みを取り除けるわけではない。無力さを思い知ることがある。「支えを必要としている人との一瞬一瞬を大事にする。死後だけでなく、生に向き合いたい」<sup>26</sup>

松山氏は臨床宗教師として新潟県長岡市の長岡西病院で活動をしている。松山氏は同書にて、医療現場での臨床活動をこう述べている。

死にゆく患者から「お坊さんが来てくれてありがたい」と口々に言われ、いたたまれなくなった。「救いや

癒やしを求める切実な願いに応えられるのか」(中略)「失敗は取り返しがつかない。明日会えないかも知れないから」。答えのない死と生の問いのはざままで、限られた命に思いを向ける。(中略)病棟設立から20余年。地道に活動を続け、特別な目で見られることは少なくなかった。(中略)「読経を聞き、仏堂で手を合わせると落ち着く」。利用者は安らかな表情を浮かべていた。(中略)臨床に立つ宗教者の使命とは何か。「最期まで自分らしく過ごせるよう支え、死や人生の意味の答えを紡ぐ手助けをすること」<sup>21</sup>

松山氏が、臨床宗教師として活動する病棟はビハール病棟と呼ばれる。ビハールとは、一九八〇年代から始まった仏教者が医療現場で終末期の患者のケアを行う活動を指す。松山氏が、「失敗は取り返しがつかないこと」と述べるように、臨床宗教師が傾聴し話す言葉は医者や医療行為と同等の責任と信頼が伴う。先人の僧侶が、数十年の時間をかけ僧侶が医療現場に参画する環境と世間の理解を築き上げた。だから、臨床宗教師の役割は常に自己を顧みる僧侶でなければ勤まらない。

では、臨床宗教師を研究する学者はどのような関わり方を考えているのか。鍋島氏は、医療現場が求める臨床宗教師をこのように述べている。

医療が求める臨床宗教師とは、宗教宗派を超えて協力しあい患者を支援する宗教者、患者が胸にふりつもつた思いを話しやすい「屑籠」のような宗教者、「暗闇を罵るのではなくて一本の蠟燭に灯りをともそう」と努力する人であることがわかる。<sup>22</sup>

鍋島教授は、宗教者が一つになり、患者にとって本音を吐き出しやすい存在になることを期待している。つま

り、臨床宗教師は病に伏し苦しむ者が抱える気持ちをしつくり吐かせて、心の整理をお手伝いする存在である。病を患う人に、「頑張れ」や「お大事に」と言うのは簡単だが、その言葉は相手の負担になってしまう。だから臨床宗教師は、患者に寄り添う治療（以下寄り添うケアとする）を施す役割を医療現場から求められている。大河内大博氏は「〈書評〉 谷山洋三著『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア臨床宗教師の視点から』」にて、寄り添うケアをこう述べている。

寄り添うというケアにおいては、むしろ、ケアを提供する者が無力であることが重要である、（中略）ケアしようとする者が「自分は何者か？」という自問を抜きにして、現場に立ち続けることは難しい。（中略）自身の無力に気づかされ、実際に臨床において、目の前の人の痛み一つも癒すことができない無力と向き合う。（中略）スピリチュアルケアから宗教性を排除せず、でも、宗教性が過度に吐出しないスピリチュアルケアの言語化に取り組んでいる。（中略）〈狭義の宗教的ケア〉では、教化や儀礼が行われ、癒しではなく信仰による心の安寧や救済が目指されるが、信仰を前提としない。（中略）〈宗教的資源の活用〉の領域において、それは一方で宗教的ケアでありつつ、布教・伝道を目的としたわけではない、スピリチュアルケアの営みが内包されている、という整理法である。<sup>29</sup>

寄り添うケアは、ケアを施す臨床宗教師が自分の無力感を自覚した上で向き合う相手の気持ちを理解しようとする謙虚な姿勢が大事だと分かる。またスピリチュアルケアは、終末期のがん患者だけでなく人生のあらゆる場面で生きる意味や自己有用観等を失ったと感じる人々の痛みを軽減するケアを指す。このような布教、信仰を

的としない宗教的ケアを行うには臨床宗教師がそれぞれ属する宗教に対する高度な知識、理解が求められる。だが、臨床宗教師が世間に認知され、医療現場で活動するようになったのはごく最近である。臨床宗教師は、医療現場に出入りする他の専門職と違い「宗教」を扱う。ゆえに、彼らは時に政教分離の観点から活動中は共通のエプロンを着用せねばならない等の制限を受ける。では、医療現場関係者は臨床宗教師をどのように捉えているか。医師で龍谷大学実践真宗学研究科教授の田畑正久氏は『老・病・死の現場から』にて次のように述べている。

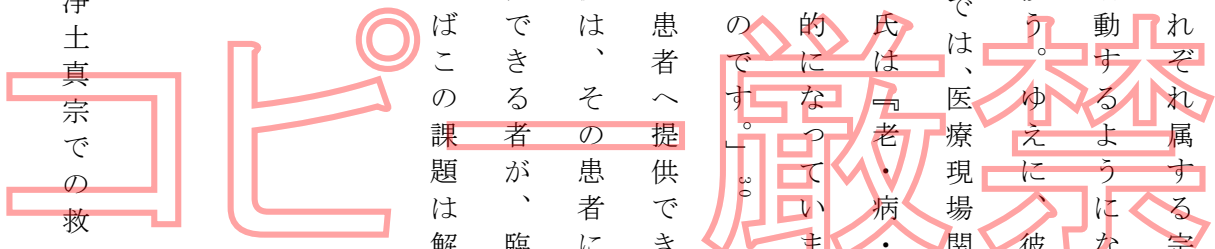
「医療の世界で、健康で長生きということが目的になっていいますが、本当の目的というのは、生きることの意味・使命・役割というものを実現させることなのです。」

医師は患者を治癒することで身体的な「生」を患者へ提供できる。しかし、患者が病を完治しても生きる希望をなくしているならばどうか。果たしてその状況は、その患者にとって幸せなのか。医療でカバーできない心の安穩、つまり宗教がつくる心理的な「生」を提供できる者が、臨床宗教師であると私は考える。つまり、宗教者が参画する組織や団体で連携していく姿勢を持てばこの課題は解消できる。宗教者しか施せない「心の治療」を期待する声は日々高まっていると私は考える。

### 第三章 親鸞における死生観と救い

#### 第一節 浄土真宗の救い

この節では、浄土真宗の救いについて考える。浄土真宗での救いを考える上で、今回は歎異抄を中心に紐解く。



歎異抄第四条では次のやりとりが親鸞聖人と弟子の唯円との間でなされている。

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐぐむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐることに、きはめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかにいとほし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云々。

歎異抄第四条は、聖道門と浄土門の慈悲についてそれぞれ述べられている。まず、慈悲とは何か。龍谷大学教授の内藤知康氏は『やわらかな眼』にて慈悲について詳しく述べている。

仏教では、慈悲に三種があるとされます。その第一は小慈小悲であり、衆生縁の慈悲といわれます。その第二は中慈中悲であり、法縁の慈悲といわれます。その第三が大慈大悲であって、無縁の慈悲といわれます。(中略)この無縁の慈悲は、如来さまの慈悲ですから、如来さまの性質として自然に起こってくる慈悲が無縁の慈悲であり、これが大慈大悲といわれます。

また大谷大学の木越康氏は『ボランティアは親鸞の教えに反するののか』にて、聖道の慈悲と浄土の慈悲を次のように説明している。

「聖道の慈悲」とはしたがって、自力によって慈しみ悲しみの利他的行為を完成させようとする聖者の精神を言う。慈しみと悲しみの二つの心を自ら大切に保持し、他者の救済を完成させようとする心である。とこ

ろが第四条で親鸞は、このような聖道の慈悲によって他者を憐れみ、悲しみ、育んでも、思い通りに助け遂げることは極めて困難だと述べるのである。(中略) 対する「浄土の慈悲」とは、「大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益する」こととされる。

親鸞聖人は、歎異抄第四条で「この世の中で生きる間はどれだけかわいそうだと考えても自分の思うように救うことはできない。」と説いている。それは、人間の苦しさで悲しさであり人間の愛に起因する。人間は、家族愛や友愛等といった「愛」で、相手と心からつながりあうことができる。だが、私たちは愛を通して時に相手を温め、苦しみと悲しみを与えてしまいが時間が経つとその感情を忘れる。阿弥陀仏の大慈大悲心とは、そんな人間の破裂しそうな心を包み込む優しい母の手のようなものである。

## 第二節 親鸞聖人の死生観

この節では、親鸞聖人の死生観を和讃より見ていく。親鸞聖人は、『正像末和讃』で「(五一) 南無阿弥陀仏の回向の恩徳広大不思議にて往相回向の利益なかりせば浄土の菩提はいかがせん(五二) 往相回向の大慈より還相回向の大悲をう如来の回向なかりせば浄土の菩提はいかがせん」(『註釈版』六〇九頁)と遺している。浅井成海氏はこの二首の和讃を『聖典セミナー三帖和讃』正像末和讃にてこう講読する。

往相も還相も如来の回向であり、還相は浄土に往生した人が他の人が他の人を導く利他のはたらきであることがよくわかります。(中略) 限りある命を生きる私ですが、南無阿弥陀仏のみ教えにお育てを受ければ、死



は終末ではなく、そこから大いなる活動が約束されているのです。(中略) 往相回向を大慈とあらわし、還相回向は大悲をうることだと讃えています。(中略) さらに浄土に往生したものは、速やかに還相の菩薩となつて、如来と同じく、あらゆる人びとの悲しみをともに悲しみ、浄土に往生せしめるはたらきをします。(中略) 如来のはたらきによって苦しみを乗りこえる道が開かれるということは、智慧のころを与えられるということであり、それはともに他の人びとの苦しみを分かちあうという慈悲のころをうるということです。<sup>34</sup> また、梯實圓氏は『生死を包むもの』にて還相回向を次のように説明している。

親鸞聖人によれば、浄土に生まれたものは、阿弥陀如来さまと同じ無上涅槃をきわめるから、いま阿弥陀如来がなさっているように十方世界にさまざまなすがたをとって変現して、すべてのものを支え、導くという活動をなさしめられるのだといわれます。それを還相回向と言われましたが、浄土に生まれていくということとは、この世へ還ってきて、天地万物のなかに生きつづけ、万人を支え導くものになることだったので。

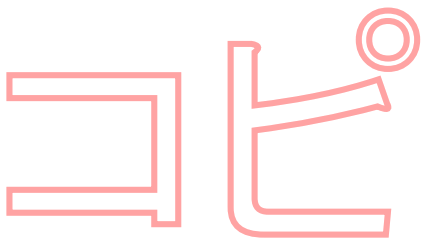
35

死は終わりではなく始まりである。これが還相回向だ。浄土に往生した者は、苦しみ喘ぐ世界で衆生に寄り添い、救いとるはたらきをする。これが、親鸞聖人の死生観であると言える。

結論

本論では、東日本大震災での僧侶の役割、臨床宗教師の活動を親鸞聖人の教えから考察した。震災から六年近くが経ち、その時々に応じて僧侶や門信徒は被災地、被災された方々へ支援を行ってきた。親鸞聖人が歎異抄第二条で「とても地獄は一定すみかぞかし。」とこの世を説いたように、被災された方々は二〇一一年三月十一日以降誰かを失った苦しみと向き合い続けている。それは、自分の力で解決できない「生き地獄」である。

そして今回、東北地方でフィールドワークを行い、気づいたことがある。それは、震災が残したやり場のない苦しみが恨みや摩擦に変化し、新たな苦しみを生み出していることである。では、僧侶にできることは何か。それは、各々が置かれた立場で人びとの苦しみに耳を傾けることではないか。被災した僧侶は被災された方々と同じように身内や大切な人を失った者もいる。同じ苦しみに置かれることで、人々の痛みを等身大で共感し心をほぐす役割ができる。被災してない僧侶は、被災された方々や被災した僧侶の誰にも言えない心の深い傷に寄り添う役割ができる。震災前の生活が戻りつつある今だからこそ、僧侶は自らの立場でできる支援を続けていくことが大切だ。今こそ僧侶の真価が問われている。



註

- ① 東北教区現地緊急災害対策本部「東北教区災害ボランティアセンターの活動について」
- ② 浄土真宗本願寺派仙台別院副輪番廣川明秀氏の話、二〇一六年十月二十五日、仙台別院、宮城県仙台市青葉区支倉町一番二十七号
- ③ 浄土真宗本願寺派仙台別院職員H氏の話、二〇一六年十月二十六日、仙台別院、宮城県仙台市青葉区支倉町一番二十七号
- ④ 東北教区現地緊急災害対策本部「東北教区災害ボランティアセンターの活動について」
- ⑤ 鍋島直樹『死別の悲しみービハーラの心を求めてー』一〇頁
- ⑥ 東北教区現地緊急災害対策本部「東北教区災害ボランティアセンターの活動について」
- ⑦ 金澤豊「震災復興支援活動(下)ー宗教者としての学びと気づき」『大法輪』二〇一五年五月号、一七六頁
- ⑧ 浄土真宗本願寺派仙台別院副輪番廣川明秀氏の話、二〇一六年十月二十五日、仙台別院、宮城県仙台市青葉区支倉町一番二十七号
- ⑨ 浄土真宗本願寺派専能寺住職足利一之氏の話、二〇一六年十月二十八日、専能寺、宮城県仙台市宮城野区蒲生鍋沼十六
- ⑩ 脇谷暁融、杉原真『真宗震災支援ネット』三頁
- ⑪ 脇谷暁融、杉原真『真宗震災支援ネット』五頁
- ⑫ 浄土真宗本願寺派専能寺住職足利一之氏、同坊守足利由美氏の話、二〇一六年十月二十八日、専能寺、宮城県仙台市宮城野区蒲生鍋沼十六
- ⑬ 脇谷暁融、杉原真『真宗震災支援ネット』十一頁
- ⑭ 浄土真宗本願寺派専能寺住職足利一之氏の話、二〇一六年十月二十八日、専能寺、宮城県仙台市宮城野区蒲生鍋沼十六
- ⑮ 藤丸智雄『ボランティア僧侶 東日本震災被災地の声を聴く』十七頁、二〇頁
- ⑯ 河北新報社編集局編『挽歌の宛先 祈りと震災』六十八頁、六十九頁
- ⑰ 曹洞宗普門寺副住職高橋悦堂氏の話、二〇一六年十月二十六日、箱塚屋敷仮設住宅、宮城県名取市手倉田字箱塚屋敷三番地の二
- ⑱ 箱塚桜仮設住宅住民A氏の話、二〇一六年十月二十五日、箱塚桜団地、宮城県名取市箱塚一丁目十二番十三号
- ⑲ 浄土真宗本願寺派高岡教区仏教婦人会会員B氏の話、二〇一六年十月二十五日、箱塚桜団地、宮城県名取市箱塚一丁目十二番十三号
- ⑳ 東北教区ボランティアセンター職員A・Y氏の話、二〇一六年十月二十五日、箱塚桜団地、宮城県名取市箱塚一丁目十二番十三号

- 21 梶葉子「臨床宗教師とともに歩む最期」『週刊朝日』二〇一六年二月十九日号、八十四〜八十五頁
- 22 鍋島直樹「臨床宗教師研修の目的と特色」『真宗学』一三二、一五頁
- 23 高橋原「宗教者による心のケアの課題と可能性―臨床宗教師養成の試み―」『宗務時報』一一七、三十四頁
- 24 高橋原「宗教者による心のケアの課題と可能性―臨床宗教師養成の試み―」『宗務時報』一一七、三十四頁
- 25 曹洞宗普門寺副住職高橋悦堂氏の話、二〇一六年十月二十六日、箱塚屋敷仮設住宅、宮城県名取市手倉田字箱塚屋敷三番地の二
- 26 河北新報社編集局編『挽歌の宛先 祈りと震災』一五〇頁
- 27 河北新報社編集局編『挽歌の宛先 祈りと震災』一五八〜一六〇頁
- 28 鍋島直樹「臨床宗教師研修の目的と特色」『真宗学』一三二、十頁
- 29 大河内大博「(書評) 谷山洋三著『医療者と宗教者のためのスピリチュアルケア臨床宗教師の視点から』」『宗教と社会貢献』6(2) 六十二頁
- 30 田畑正久『老・病・死の現場から』四十七頁
- 31 本願寺出版社『歎異抄 現代語訳付き』二十四頁
- 32 内藤知康『やわらかな眼』一四八〜一四九頁
- 33 木越康『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』六十二〜六十三頁
- 34 浅井成海『聖典セミナー三帖和讃』正像末和讃』一七〜一八三頁
- 35 梯實圓『生死を包むもの』四十八〜四十九頁

参考文献  
書籍

- ・ 浅井成海『聖典セミナー三帖和讃』正像末和讃』、本願寺出版社、二〇〇四年
- ・ 五十嵐大策『真宗における信心と念仏第一巻』、永田文昌堂、一九八一年
- ・ 池上彰『池上彰の宗教がわかれば世界が見える』、文春文庫、二〇一一年
- ・ 石井光太『祈りの現場 悲劇と向き合う宗教者との対話』、サンガ、二〇一五年
- ・ 稲場圭信、黒崎浩行『震災復興と宗教』、明石書店、二〇一三年
- ・ 大谷光淳『ありのままに、ひたむきに 不安な今を生きる』、PHP研究所、二〇一六年
- ・ 梯實圓『聖典セミナー歎異抄』、本願寺出版社、一九九五年
- ・ 梯實圓『生死を包むもの』、百華苑、二〇〇四年
- ・ 河北新報社編集局編『挽歌の宛先 祈りと震災』、公人の友社、二〇一六年
- ・ 勸学寮編『浄土三部経と七祖の教え』、本願寺出版社、二〇一四年
- ・ 木越康『ボランティアは親鸞の教えに反するのか』、法藏館、二〇一六年

- ・北塔光昇『聖典セミナー三帖和讃』高僧和讃』、本願寺出版社、二〇〇〇年
- ・黒田覚忍『聖典セミナー三帖和讃』浄土和讃』、本願寺出版社、二〇〇六年
- ・国際宗教学研究『現代宗教2013』、秋山書店、二〇一三年
- ・佐々木恵雲『臨床現場の死生学―関係性みる生と死』、法蔵館、二〇一二年
- ・佐々木恵雲『生死と医療』、本願寺出版社、二〇一六年
- ・信楽峻磨『親鸞とその思想』、法蔵館、二〇〇五年
- ・浄土真宗本願寺派阪神・淡路大震災記録誌編集委員会『浄土真宗本願寺派阪神・淡路大震災の記録』、浄土真宗本願寺派、一九九八年
- ・浄土真宗本願寺派『浄土真宗聖典（註釈版）第二版』、本願寺出版社、二〇一一年
- ・浄土真宗本願寺派『浄土真宗聖典 顕浄土真実教行証文類（現代語訳）』、本願寺出版社、二〇一一年
- ・浄土真宗本願寺派『東日本大震災 その時、そして復興へく結ぶ絆から、広がるご縁へく』、本願寺出版社二〇一四年
- ・田代俊孝『親鸞思想の再発見 現代人の仏教体験のために』、法蔵館、二〇一六年
- ・田畑正久『老・病・死の現場から』、法蔵館、二〇〇一年
- ・田畑正久『医療文化と仏教文化』、本願寺出版社、二〇一五年
- ・田畑正久『医者が出遇ったら』、本願寺出版社、二〇一六年
- ・千葉乗隆『親鸞聖人のがたり』、本願寺出版社、二〇〇九年
- ・内藤知康『やわらかな眼』、本願寺出版社、二〇〇五年
- ・内藤知康『聖典セミナー一念多念文意』、本願寺出版社、二〇一四年
- ・長倉伯博『ミトルヒト』、本願寺出版社、二〇一五年
- ・鍋島直樹、内藤知康編『龍谷パドマ12いのちの重さを見つめて―自死の悲しみと死を超えた慈愛』、龍谷大学人間・科学・宗教オーブン・リサーチ・センター、二〇〇九年
- ・鍋島直樹『死別の悲しみービハラの心を求めてー』、本願寺出版社、二〇一五年
- ・藤丸智雄『ボランティア僧侶 東日本大震災被災地の声を聴く』、同文館出版、二〇一三年
- ・本願寺出版社『歎異抄 現代語訳付き』、本願寺出版社、二〇一五年
- ・本多雅人『愚に帰る 悲しみのままに開かれる世界』真宗大谷派名古屋別院、二〇一四年
- ・三木英『宗教と震災 阪神・淡路、東日本のそれから』、森話社、二〇一五年
- ・村上速水『親鸞読本―その人間像の追求―』、百華苑、二〇〇〇年
- ・村上速水『親鸞教義とその背景』、永田文昌堂、二〇一二年
- ・吉田利康『悲しみを抱きしめて グリーフケアおことわり』、日本評論社、二〇一三年
- ・龍谷大学ボランティアNPO活動センター『龍谷大学東日本大震災復興支援ボランティア活動報告書（20

11年(2015年)、『紀書房、二〇一五年  
脇谷暁融、杉原真『真宗震災支援ネット』、妙覚寺、二〇一五年

論文

- ・ 吾勝常行「ビハーラ活動における真宗者の心理的配慮の一考察」『真宗学』一二六、二〇一二年
  - ・ 石井研士「世論調査から見た近年の日本人の宗教意識と宗教行動」『宗務時報』九十六、一九九五年
  - ・ 岡村青「東日本大震災から5年―激甚災害から復興する寺院(いわき市)」『大法輪』二〇一六年六月号、二〇一六年
  - ・ 金澤豊「震災復興支援活動(上)―宗教者としての学びと気づき」『大法輪』二〇一五年五月号、二〇一五年
  - ・ 金澤豊「震災復興支援活動(下)―宗教者としての学びと気づき」『大法輪』二〇一五年五月号、二〇一五年
  - ・ 岸野亮哉「お寺のありかた、僧侶の姿(上)」『大法輪』二〇一三年七月号、二〇一三年
  - ・ 岸野亮哉「お寺のありかた、僧侶の姿(下)」『大法輪』二〇一三年七月号、二〇一三年
  - ・ 岸野亮哉「あかり(下)」『大法輪』二〇一五年五月号、二〇一五年
  - ・ 岸野亮哉「慈しみ」―身元不明の遺骨を預かる寺院『大法輪』二〇一三年二月号、二〇一三年
  - ・ 岸野亮哉「道」『大法輪』二〇一三年三月号、二〇一三年
  - ・ 櫻井義秀「人口減少社会における心のあり方と宗教の役割」『宗務時報』一一五、二〇一三年
  - ・ 高橋原「宗教者による心のケアの課題と可能性―臨床宗教師養成の試み」『宗務時報』一一七、二〇一四年
  - ・ 高橋原「臨床宗教師の可能性―被災地における心霊現象の問題をめぐって」『現代宗教2013』、二〇一三年
  - ・ 鍋島直樹「臨床宗教師研修の目的と特色」『真宗学』一三二、二〇一五年
  - ・ 松尾剛次「近世の仏教再考(1)―近世仏教墜落史観の見直し」『大法輪』二〇一三年六月号、二〇一三年
  - ・ 山本宗補「被災地で出会った青年僧と仲間たち」『大法輪』二〇一三年一月号、二〇一三年
- ウェブサイト
- ・ 曹洞宗公式サイト・曹洞禅ネット、<http://www.sotozen-net.or.jp/teqw/j20130808.html>、二〇一六年二月二十五日閲覧
  - ・ 宮城県復興応援ブログコロプレス、<http://kokoropress.blogspot.jp/2012/02/1.html>、二〇一六年一月二十五日閲覧